2015年12月20日（日） 岐阜新聞

サンデーコラム

中村正・秋田屋本店社長

研究進むプロポリス

目指せノーベル賞

プロポリスとの出合いは30年前の１９８５年でした。この年の10月、東洋で初となる第30回国際養蜂会議（通称アピモンディア）が名古屋で開催されました。地元企業ということもあり、実行委員会に参画し、大会の運営と併せて展示や学術発表、商品のコンテストへの出品等、事前の準備期間から大会までのロングランに亘りイベント漬けの生活を過ごすこととなりました。

六つの蜂産品は、蜂蜜、ローヤルゼリー、蜜蝋、花粉荷、蜂毒（蜂針）、蜂ヤニと云われ、人々の健康や生活に深く関わっています。その中で蜂ヤニは楽器や金属のつや出しに使われるものといったイメージでしたが、アピモンディア名古屋大会で「プロポリス」と称され、大変健康に良いものであることが発表されました。

小生は、41年前の１９７４年に当時、東京・目黒にあった森永乳業中央研究所にて蜂蜜の品質検査の研修以来、商品の品質保証の重要性を痛感し、分析検査に力を入れてきました。その結果としてアピモンディア名古屋大会では、ミツバチ治療分科会にて、「医薬品ローヤルゼリーの品質規格について」という演題で発表をしました。ローヤルゼリーについて、弊社では昭和38年に医薬品として承認を受け、研究、開発、マーケティングを推進してきました。しかし、プロポリスについては、それまで有効活用の認識が無く、アピモンディア名古屋大会で、欧州諸国によるプロポリスの効果の発表に驚き、衝撃を受けました。これを機に研究をスタートしました。

それから30年が経ち、共同研究を進め、小生自身、医学部大学院医学研究科に10年在籍し、ラットの肝・胆道障害に対するプロポリス等の研究で、博士（医学）の学位を取得することができました。これを通過点としてさらに研究を発展させ、医薬品として承認が受けられるよう努めたいと思います。

ローヤルゼリーは広く普及し、研究も数多く発表されるようになりました。六つの蜂産品の内、ローヤルゼリー、蜂蜜、蜜蝋は日本薬局方に収載され、医薬品としても利用されています。プロポリスは蜂産品の中でも免疫力を高め外敵から体を守る機能を持つエース的存在です。こうしたプロポリスの抗酸化作用に注目し、大学と共同研究を進め、小生自身、医学部大学院医学研究科に10年在籍し、ラットの肝・胆道障害に対するプロポリス等の研究で、博士（医学）の学位を取得することができました。これを通過点としてさらに研究を発展させ、医薬品として承認が受けられるよう努めたいと思います。

そして将来、後進の研究者にはノーベル医学生理学賞を目指してもらいたいと期待しており、プロポリスはじめ蜂産品はその価値を充分に持つ素晴らしいミツバチの贈り物であると確信します。

30年前に欧州から紹介されたプロポリスを、さらに健康に役立つ商品として、日本から発信出来たら何と素晴らしいことでしょう！ 微力ながらそのための一助となるよう努めたいと思います。

なかむら・ただし １９５１年、岐阜市生まれ。博士（医学）。藤田保健衛生大学大学院医学研究科研究生。県製薬協会長。県研究開発財団評議員。みつばち の家理事長。県養蜂組合連合会長。岐阜南法人会長。県経済同友会代表幹事。岐阜放送番組審議会委員、県フェンシング協会長。県立岐阜北高校同窓会長。